



栽培技術を学ぶ研修には、地元の若者や農家が参加

制約だらけの生活を 送る人々

帰る家があり、家族がいて、自分が生まれ育った国がある。私たちには当たり前前の日常だが、世界には、自分でも何かを決めることさえ許されない人々もいる。中東和平のカギを握るパレスチナの現実だ。

イスラエルとの国境は厳重に管理され、ヨルダン川西岸地区でもガザ地区でも、人や物は許可なしには移動できない。いつ生活物資や食料が足りなくなるか、いつ戦闘に巻き込まれるか、そこに暮らす人々にさえ分からないのだ。

「パレスチナ問題は長年にわたって解決されておらず、世界の難民の4人に

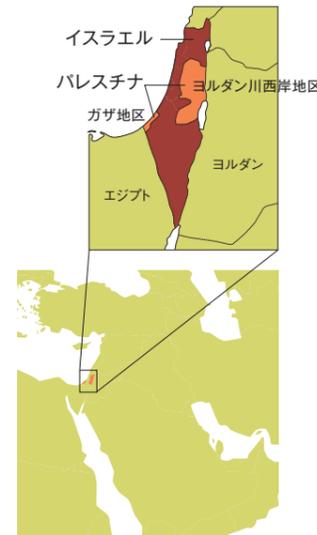


国際協力の担い手たち

認定NPO法人 パレスチナ子どものキャンペーン

未来を変える子どもの力

生まれた時から、平和と自由がないパレスチナの人々。この地域の未来を切り開く子どもたちを支援するのが、認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーンだ。



1人はパレスチナ人といわれるほど。将来が見えないまま、毎日を生き延びなければならぬのです。そう話すのは、認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン(CCP)の田中好子事務局長だ。

団体名の通り、パレスチナの子どもたちに対する国際協力を27年間続けてきたCCP。それにはある理由がある。この地域では、人口の約半数が15歳以下。彼らの「生きる力」を育むことが、社会を変える力につながると考えたからだ。

子どもの自立への一歩を 後押しする

CCPの主な活動地域の一つが、イスラエルとエジプトに面したガザ地区。中でも力を入れるのが教育支援だ。

1992年には、ガザ地区で最初のろう学校を設立した。それまでは教育



日本人専門家から農業の技術を習得しようと研修生は真剣だ

を受ける機会がなく、外にあまり出られなかった障害のある子どもたち。学校ができたことで、学校に行くことが普通になり、手話、文字、算数などの科目を学べるようになった。職業訓練コースも設置し、調理コースの卒業生が中心となってレストランを開くなど、障害のある子どもたちが自立し、社会に参加するチャンスが広がっている。

また、子どもの数が多いガザでは小学校が午前と午後の二部制。しかし、1日4時間の勉強時間では十分な知識を身に付けることが難しい。2005年に現地の女性団体と共同で設立した児童館は、子どもたちの放課後の居場所。その活動の一つとして実施している補習クラスでは、ゲームを活用するなど学ぶ意欲が高まるよう工夫し、現地の小学校の教員ともその指導法を共有している。「子どもたちを通して、家族や地域社会も変わってきています」と田中さんは話す。

農業から切り開く 未来

CCPの支援の対象は、いわゆる小さな子どもたちだけではない。ガザ地区では、イスラエルの空爆で大学の施設が破壊され、授業を受けられなかった若

者も多い。そこで日本人専門家も加わり、野菜や果物の栽培技術や環境に優しい農業などを伝える研修を実施している。

「研修で実践的な技術を学んで、農業の面白さが分かってきました。将来は留学して博士号を取得し、ガザ地区の大学で教えるのが夢です」と研修生のイブラヒムさん。イスラエルによる封鎖で必要な物資が手に入らなかったり、水質悪化などの環境問題に直面するガザの農業だが、研修に参加した若



20年以上支援してきたろう学校では、子どもたちが生き生きと学んでいる



児童館では授業の補習の他、子どもたちのこころのケアも行っている



「活動30周年に向け、日本での情報発信に力を入れたい」。JICAから広報のアドバイスをするために派遣された吉川真理子さん(左)と戦略を立てる田中さん(中央)

者や地元の農家によって、少しずつ変わろうとしている。

このような活動の中でCCPが何よりも大切にしているのは、どんな場においても、現地の人々が主役だということ。この地域の未来をつくっていくのは彼ら自身だからだ。「今の状況がマイナス10だとしても、人づくりを通してマイナス7にはできるはず。中東和平には最終的に政治的な解決が不可欠ですが、地域に根差して活動するNGOにしかできないこともあります」と田中さんは話す。

パレスチナの人々は、今も私たちと同じように日常を生きている。「ニュースになるのは戦争や犠牲者が出たときだけ。日本とはかけ離れた世界だと思われがちですが、希望を失わず前向きなパレスチナの人々に私たちは希望をもらっています」。田中さんたちは現地の人々と共に、今までと違う未来の可能性を探し続けている。